中国服の歴史による，現代チャイニーズ風服装の発想と展開

Conception and Development of Modern Clothes in the Chinese Style from a Standpoint of Chinese Clothes History

張　　静

Jing ZHANG

一　はじめに

古代中国における服装は，特定の社会制度，生産方式，道徳観念，民族精神，風俗風習の影響を受けながら，独特の様式を生み出す。古代の人々は，自分の知恵と能力により，次第に生活の中で自分自身を美しく作り上げながら，美しく見せる技術を把握してゆき，美しく彩られた服飾の歴史を描き綴ってきた。

中国の服飾の歴史は，中華民族の文化の一つを形成している。そして豊富で多彩な歴史の資料は，過去の輝かしい文化の研究課題を私たちに提出してくれる。例えば，西域の胡舞が中原に伝播して，漢民族の服飾へと変化したこと，唐時代の思想的開放が服飾上に与えた影響，宋時代の朱子学が女性の服飾に与えた影響，さらに古代各民族間の交流により，今日古い時代の伝統を多分に残している少数民族の服飾文化など，これはいかにして今日まで継承されたものであるか，中国の文化遺産を学びながら，古代服の様相と秘訣を探求していく。

中国の古代服飾の歴史を学びながら，古代の様々な民族衣裳から，その独特なデザイン，図案，色彩，模様，着装方式を観察し，東方古代文化の味わいのある貴重な発見をしていきたいと考え目的とした。

二　古代服の式様，紋様，色彩について

五千年の歴史を持つ中国歴代の服飾は多種多様である。但し，式様，紋様，色彩などにおいては，一定の規律がそこに見られる。

衣服の形式上から見ると，大きく二つに分類される。一つは上衣下裳の形式，もう一つは衣裳連属の形式である。商周時代以前は主に上衣下裳の形式を着用していた。衣服は上下に分かれており，上半分を「衣」，下半分を「裳」と称した。春秋戦国になると，また新たな衣服の形式が出現した。それは上下が一体となって一枚の衣服となったもので，「深衣」と称した。古代の女性は主に「衣」か「裳」の形式を着用していたが，男性は隋・唐以後主に上下連属式の「深衣」，いわゆる後世の袍や衫などの服を着用していた。

そして，衣服の装飾の紋様は，一般に動物，植物及び幾何形の図案を用いられていた。表現の方式は，抽象的なものから，規范的になった。さらに変化して写実的な段階をさかのぼった。商周時代以前の図案は，原始時代の漢字に似ていて，簡潔で抽象的な趣意を表した。周朝時代以後，装飾の図案の分布は徐徐に厳密となり，整然としていて，上下，左右対称にした図案が好まれた。この特徴は唐・宋時代に亙って長い歴史を経た。そして明，清時代の紋様は写実的な手法が重視され，例えば，一束の花，或いは美しい蝶々たちなど現実の生活のものをそのまま服装に装飾し，大自然を表していた。装飾された紋様は精美で，本物のように生き生きしていた。清時代の後期には写実の手法の流行は盛んになり，頂点に達した。

また，衣服の色彩にとっては，蔭陽五行学説の影響を受け，厳しく定められた。例えば，黄色は最も貴重な色で，中央に置く。青色は東方，赤は南方，白は西方，黒は北方と決まっていた。さらに，青，赤，皀，白，黄色など五種の色は「正色」（原色）となり，皇帝及び官僚など上層の人が使用する色と定め，一般人は原色以外，いわゆる「間色」しか着用できなかった。服装の歴史上から見ると，上古の時期までの服装の色彩は単純で色鮮やかだが，経済の発展につれて，人々は色彩の求めが高まり，色が単純の代わりに，複雑しかも協調の色彩の感覚になり，また，赤と緑，黄と紫，藍と橙の対比色調が次第に淘汰され，代わりに，赤と黄，黄と緑，緑と藍など近い色相を大量に採用された。配色も落ちつき，上品になり，色全体の調和するにより，富貴の感触が表れる[1)]。

三　古代服の形式

長衣

「長衣」は上下連属という形式であるが，古代では「深衣」と称した。深衣の形式は，まず，衣服の「衽」は前身頃のことである。そのため大襟，対襟の名称がある。大襟は衽の上前と下前とを重ねた形になったもので，対襟は胸前で衽を突き合わせにし重ならない形式のものである。もし衣服の衿を右前に着れば右襟と呼び，左前に着れば左襟と呼ぶ。また右衽，左衽の呼び方もある。衣の裾とは，衣服の後ろの裾幅部分のことで，深衣の衣襟（前身頃）は長く伸びていたので，着用時に必ず後ろに巻かなければならず，こうして「曲裾」が形づくられた[1)]。（図１参照）「曲裾」という意味は，湾曲し，ラッパ状に広がっている状態の裾のものを指す。

湖南省長沙馬王堆の前漢墓出土の女性の服飾から見ると，全部で十二枚の衣服の中に，深衣は九枚を占めていた。前漢時代の女性の深衣もまた明瞭な特色があった。それは衣襟を極めて長く伸ばし，着用する時に身体に数回巻き付けたもので，衣服の縁飾りが外部に露出し，格別な趣を備えている。資料により，まず，身体にきつく巻き付けて，巻いている衣襟が崩れないため，シルクの帯でウエスト，或いはヒップに締めて固定させる。

やがて深衣に取って替わるものとして「袍」，「衫」が現れた。

袍服の様式は，時代を経るごとに変化していった。最初は一般に交領（衿あわせが互いに交差している）直裾が採用され，丈は脚の甲まで達していた。その後，改良されて円領（丸い衿ぐり），対襟となった。（図２参照）袍服の袖の形は，初めに多くが大袖であり，腕の部分が非常に広く円弧を描いており，また衣の袖口は明らかに少し細目になっており，袖口には殆どの場合縁取りがある。

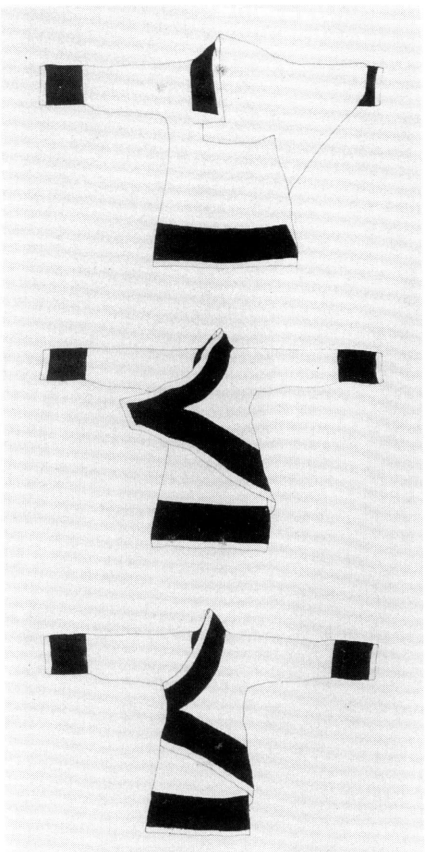

図１曲裾深衣の着付け図
（中国歴代服飾より）

図２交領大襟の袍を着た唐時代女性
（出土壁画，中国五千年女性装飾史より）

こうした服装は，北方地区の少数民族にとっては，機能上に非常に不便であった。そこでこの地区においては筒袖の服が出現した[4]。

満州族の袍服は，「旗袍」（チーパオ）と呼ばれている。清時代初の旗袍は，多く絹製で刺繍が施されており，その形状は円領，筒袖，衣襟は右前で，脇の部分が細くなっている。そして裾の部分は広がり，襟元には一本の細い黒縁が縫い込まれていた。

そして清時代末の旗袍は，これに異なり，その最大の特徴はゆったりとしていることにある。丈は足元まで届き，袖はまっすぐで大きい，袖口は平たく広めであった。旗袍は，上から下まで，一枚の生地で裁断縫製され，ひだやタックは一切とらないため，曲線はほとんど見られない。そして脇部のしぼりも緩やかになっている。きっちりとした高い襟元は，優雅で上品な味わいを見せていた。生地は，錦，緞子織り，または，藍色の布を用い，旗袍の裾，袖口，襟元に，花，草などの模様の刺繍で縁を飾った。すっきりと流れるようなラインの旗袍は，現代中国女性の服装に大変大きな影響を及ぼしていた[2]。（図３参照）

袍服と類似した服装に「衫」がある。衫は漢代以後に出現した服装であり，そこには三つの大きな特色がある。その一つは，裏地のない単衣である。その二は，衣の袖である。衫は夏服の一種であるため，生地は薄くて，両袖が垂直に広くなった形式になっていた。その三は，衣襟である。衫は交領ではなく，対襟が採用され，いわゆる衿あわせ部分を前身頃で交差させず，そのまま下に垂らした。このようにすると，胸部の多くが外面に露出し，夏季に適していたのである。（図４参照）

図３清時代末の旗袍
（伝世品，中国歴代服飾より）

図４対襟，大袖の衫を着た唐時代貴婦人（出土品，中国五千年女性装飾史より）

図５対襟，筒袖の短襦を着た唐時代女性（出土陶俑，中国五千年女性装飾史より）

短　衣

長衣は，重大な典礼時には一般に着用したが，平素，家にいる時は「短衣」を着用していた。短衣のなかで，最もよく見かけられるのは「襦」

である。早期には，一般に内衣として着用したが，襦の形態がゆったりしているものは少なく，動きやすいため，内衣の外側に着るようになり，唐時代に至ると，女性の主要な服装として，流行していった。

襦の長さは，通常腰部まであり，生地は，絹，羅，綺，紗，殻，錦などがある。襦の表面に施された装飾もまた変化に富んでいる。最初は単色の平紋が主であった。そして後漢以降になると，人々は襦の上に各種の文様を施すようになり，これが流行となっていった。

漢・魏時代の人々は，襦を着用し，下には長裙をはいていた。いわゆる「上襦下裙」である。襦の裾は，たいてい裙の内側に入れられる。当時の襦は大襟のものが多く，衣襟は右前であった。袖には細いものと太いもの二種類がある。そして隋・唐五代にかけて襦の様式は変化し，本来の大襟以外にも，対襟がより一層用いられるようになった。衣襟は広く開けられ，紐やボタンを用いず，下の部分は裙の中に収められていた。（図5参照）そして袖は細いものが主流となり，大袖を用いることは大変少なくなっていった。袖の長さは通常手首までであったが，手首を越えるものもあり，中には両手を袖の中に隠している者さえあった。

宋時代の人々は，社会的地位に関係なく，みんな「背子」という上衣が好む。背子の出現によって，宋時代の女性の間では襦裙を着用する者が減少した。この時期の背子の様式は，直領対襟，紐を使わず，袖は細いものと太いものの二式があり，平素，細い袖のものを多く着用した。背子の長さは膝まで届き，長裙の長さに揃えるときもある[1]。（図6参照）

袍と襦の中間にあたる上着の一種である「襖」という服は，明，清時代の女性の間では，極めて通常的に着用された。襖には決まった形式はなく，袖の広いものや細いもの，対襟のものや大襟のもの，裾が股までのものや膝までのものなど様々である。襖を着用するときは，一般に下半身に長裙をはき，襖の裾は外にして腰部を覆い隠すようにする。（図7参照）

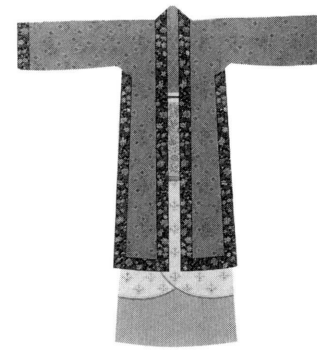

図6 宋時代の背子
（中国歴代服飾より）

図7 筒袖の短襦と長裙を着た六朝女性
（陶俑，中国五千年女性装飾史より）

唐時代の女性には，「半臂」という服がある。古墳から出土した壁画，陶俑に見られる半臂は，半袖で丈は短く（ウエスト位置），一般に襦の外側に着る。（図8参照）最初，内官や女史が着用したが，後に民間に伝わり，常服の一種となった。半臂を作る材料は，古代では西域で生産された彩錦が多く用いられた。防寒にするため，錦の材質は厚いものを用いられた。

古代の女性は「背心」（上衣の上に着用するチョッキ）を着用することもあった。最初は無装飾，比較的素朴な形式であったが，長期間わたる変化と発展を経て，清時代に至ると，背心は大きな変化が見られる。衣襟だけから見ても，

図8半臂と長裙を着た唐時代女性（出土唐三彩俑，中国歴代服飾より）

図9比甲を着た明時代女性（燕寝怡情図版，中国歴代服飾より）

大襟，対襟，曲襟，一字襟などの多種である。そして，装飾も彩繍を施すもの，縁飾りを付けるもの，紐状のボタンをつけるものなど様々である。背心の長さは，通常，腰までであったが，中には膝まで達するものもあり，これを俗に比甲と称した。清時代の女性は，みな比甲の着用を好んだ。（図9参照）

古代女性が着用していた内衣は，抱腹，訶子，抹胸，抹腹，抹肚，肚兜など20以上の名称がある。これらの名称は，同一形式のものを指す場合と，形式が異なるものを指す場合とがあるが，総合的にいえば，1種類の衣服の類型を指すものである。

抱腹の形式は，前部があるだけで，後部はない。それゆえ，この種の内衣を着用すると，背部はすべて露出した状態である。抱腹は，「鈎肩」（肩止め），「鈎肩」の間に「襠」（止め紐）が付いているが，帯で代替の場合もある。

唐時代に至ると，帯のない内衣も登場した。これは，訶子と呼ばれた内衣の1種である。透明の羅衫の中に，胸下の高さまで裙を上げて太い帯で縛り，両肩，胸の上部，後背部が露出しているのを直接見ることができる。中国の封建社会においては，このような装束で外出することは，まさに大胆な行為であった。

内衣の発展につれて，新たな形式－抹胸が登場した。古墳から出土した抹胸は，生地が二重になっており，表裏はすべて素絹を用いて，内側に少量の綿をいれたもので，全長55cm，幅40cmである。さらに上端と腰の両側には紐帯が付けられており，これにより締めるようになっていた。長さから見ると，上は胸，下は腹，すなわち上半身の前部を覆うことができた。

清時代の抹胸は，肚兜と呼ばれ，一般に菱形に作られた。上に紐帯が付き，首に掛けて使用した。そして肚兜の腰部の両側には1本ずつの紐帯が付けられ，着用する時にはこれを背後部に回して結んだ。また下縁部の角は，通常，下腹部まで達していた[6]。

下　裳

古代の人々は下半身に「裙」と「褲」を着用したが，女性の身につける裙は，漢時代以降に流行した服装の一種であった。

裙と襦や襖などの衣服を組み合わせて用いることは，中国の服装における最も基本的な形態となり，袍衫などの衣服と互いに共存し合い，10世紀以上もの間にわたって流行し続けた。

古代の女性用の裙の基本的な形式は，大体1枚ものであり，前から後ろに回し，後背部で両端を重ねて着用した。（図10参照）

裙の丈は，多く変化があったが，通常，長いものが好まれ，内側に着用する裙は，みな比較的短く，外側に着用する裙は，やや長めのもの

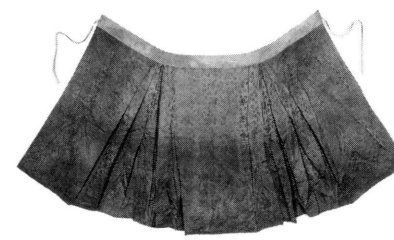

図10　明時代女裙の形式（出土品，中国五千年女性装飾史より）

が用いられた。特に隋・唐時代の女性は，裙の長さが美を表現した。そのため当時の女性は裙を胸部で締め，またある者は脇のしたまで上げて締め，裙の裾を地面まで垂らしていた。(図11参照)

裙は時代にわたり大きく変化した。後漢時代以後，活動に便利のため，裙にプリーツを付けるようになり，細いプリーツが美しくされた。隋・唐時代以後，裙の幅が更に広がると共に，プリーツもますます多くなり，百褶裙の形式も登場した。明・清時代，服装はその種類が極めて多く，形式は豊富であったが，特に，鳳尾裙，百褶裙が広く流行した。

裙の色に関しては，最初，赤の単色の裙を着用する者が多く，特に若い女性の間では，最も人気があった。その後，単色から複数の色まで染められた生地の裙と，２種類以上の色布をつなぎ合わせて作られた裙などいろいろ登場した。

春秋時代から，人々は下半身に「褲」を着用していた。その時期の褲は，ただ２本の筒状を呈し，左右が別々に独立したものである。そして唐時代に至ると，「綰襠袴」が登場した。

綰襠袴とは，要するに，春秋時代の褲と異なり，股の部分に達し，両股の間には裆があり，そして裆の部分は縫い合わされてない，帯で結び，用を足すのに便利なようになっていた。(図12参照)

開襠式の褲以外にも，古代には満襠式の褲があった。褲の裆が縫い合わされるようになると，これを着用して外出することも可能になった。軍人や社会の地位の低い人々が活動に便利なため着用した[5]。

後漢時代末，大変太く作られて，非常にゆったりとした「大口褲」が登場した。それと合わせて着用した上着は，逆に身体にフィットしたもので，俗に「褶」と名付けられた。そして褶と大口褲を共に着用する場合は，これを「袴褶」と称したのである。最初，軍服であったが，後世，民間にも広く流行し，一般人の常服となった。

唐時代の褲は，大口褲と異なり，細身のものが好まれ，褲の裾の部分は明らかに少し細目になっていた。

そして褲は，長期間にわたる変化と発展を経て，最後には，再び最初の套褲の形式に戻った。宋・清時代の女性は，套褲を着用することを好み，大流行した。(図13参照)

図11長裙を着た隋時代女性
(陶俑，中国五千年女性装飾史より)

図12宋時代の開襠式の褲
(出土実物，中国歴代服飾より)

図13　清時代の套褲
(伝世品，中国五千年女性装飾史より)

四　古代民族の交流

中国の服飾文化は，各民族の人たちが長い年月をかけて，共同して創造した文化の結晶である。数千年以来，各民族間の文化が交流していく中で，数々の精美絶倫の服装が誕生，長い歴史のある輝かしい中華民族の文化を育んできた。

各少数民族は漢民族の服飾からよいところを大量に吸収し交流があった。漢武帝時代は，二回張賽という人を西域（新疆）に派遣させ，中原と西域地区の交通の便を計るようになって，いわゆるシルクロードとして中国の文化が西域地区に流れた。このことは新疆民豊の古墳から，漢民族の錦袍を発見したことによっても証明される。この錦袍の形は典型的な少数民族のデザインであるが，生地と模様は漢民族の特色が表れている。漢民族の文字も刺繍されている。これは，中原と西域の民族の交流した事実を証明した資料であろう[1)]。

魏・晋南北朝時代は政治と経済が最も不安定な時期であった。漢時代末から，長期間の戦争の影響で，国が貧しくなり，飢餓と病気が襲われた北の人々が，南へ移転に迫られ，北の数々の少数民族の人が中原に定住し，中原の漢民族と接触することになった。漢民族の文化，生産技術，生活習慣，及び服飾など大量に吸収することにより，北方の少数民族の衣裳は極めて変化した。人々が漢民族の服飾を身につけ，漢民族の伝統的な衣冠服飾が明時代まで残した。

一方，南方の人々が北方の少数民族の服飾の特徴を取り入れて，漢服を改良した。改良した服装は，ゆったりしたものが少なく，体の曲線に合わせて，フィットした新しいスタイルが誕生した。または西北地区の少数民族の服装，いわゆる「胡服」は普段服となり，伝統的な服装様式（深衣など）は，次第に消えていった。

遼・金・元時代の政府は，全て少数民族である。この時期の服飾は，各民族の服装に基づいて制作したものである。

唐時代は，中原地方の封建社会の文化が非常に盛んになった。当時の長安は，政治，経済，文化の発祥地であり，または世界的に有名な都会と東・西の文化交流の中心地である。各少数民族，更に，日本，朝鮮，イラン，インド，ベトナムなど国々の人が長安に居住し，往来した。長安の絵画，彫刻，音楽，舞踊など芸術は従来以上栄えた。もちろん服飾にも大変大きい影響を与えられた。服飾は段々派手に変化して，開放的になってきた。特に女性服に「袒胸露臂」の服が現れ初めた。（図８参照）

当時の舞踊は非常に盛んになり，西域の舞踊（胡舞）とイラン民族舞踊がたくさん吸収された。胡舞は全国で流行するにつれて，女性はみな胡女をまねし，舞服，胡服は美しいものとして好まれていた。胡服は，唐時代に数百年にわたって流行した。（図14参照）

明時代末の頃，農民運動が激しく，満州の貴族が中国の歴史の舞台に登場し，清政府を建立した。そして，服装は複雑で，規定が多い制度に変わった。政府が定めた服装の体制は，漢民族の服装の特徴を吸収しており，例えば，中国の伝統的な十二章紋が朝服の紋様に定められ，獣の紋様の刺繍をしている服は，文，武官吏の職別の標識，鳳凰など紋様は妃の冠帽の装飾など…。他の民族服を吸収するだけではなく，自分の民族の習慣と礼儀もそのまま保っていた。

清時代の末期に，西洋文化が少しずつ入って

図14胡服を着た唐時代女性
（出土壁画，中国歴代服飾より）

きて，その影響により，服飾は，平面構成によるゆとりが少なくなり，動きやすいものに変化してきた。

中国伝統的な服飾がこのように多種多様の風格があるのは，各民族の人々の知恵の結晶といえるだろう。

五　古代服，民族衣裳からのアレンジ

コンピューター（EWH-98MODL）により

近年，コンピューター・グラフィックスがファッション業界に急速に使われており，デザイン画を画面上で素早く作業を行うことができ，プロポーションの変化，柄作り，色塗りなどすることにより，新しい着想を発展させて，デザインし，圧倒的な速さで仕上げることができる。

そこで，古代服，民族衣裳のアレンジは，このような利を活かして，計画することになった。まず，「EWH-98MODL」というシステムを使用して，研究を進めた。

方法としては，まず，モノクロのデザイン画を外部機器の「スキャナ」に置き，読み込み，モニター画面にデザイン画が現れる。次に彩色する。（デザイン画の境界線に隙間があるところに，ペイントの際に色が滲み出てしまうため，画面上で線が切れないように補正する作業を行う）線の補正のできたデザイン画を「ウインドゥ」と「ペイント」を使って，好みの色で塗り，小柄をいれる。（小柄のデータは，前もって本体に入力した）デザイン画を基本にし，色，小柄を変化させ，更に，読み込みとプリンタする際に，数値の入力による，身長，身幅の変化をさせて，デザインすることができた。

このようにして，コンピューターでデザインしたものを実際に制作してみた。

民族衣裳からのアレンジデザインの制作

雲南省のジノー族（基諾）の華やかな民族衣裳を元にして，デザインをした。

プロポーションは次の通り，身長166cm，バスト85cm，ウエスト63cm，袖の長さ57cmと決めた。

デザインは，胸に付ける三角形のエプロンに，衿なし，前あきの上着（ボタンなし）と，巻きスカート，そして，足の部分は膝からくるぶしまでの間に布を巻く。

図15のように配色を二種類デザインした。Aは，淡いピンクと淡い水色で，両方の明度を高くした。柔らかくて優雅な雰囲気が表れる。しかし，民族衣裳からイメージが離れているようにも感じた。Bは，黒色の布を基本とし，彩度の高い色布で飾り，地味の中に派手やかさを表現し，色の対比が強烈なので，民族衣裳の印象が強く与えられた。従って制作は，後者に決めた。

エプロンの形は，古代の内衣「肚兜」に似ていて，裾は三角形となっており，首，ウエストは紐で結び，胸のところに五彩の縁飾りをつけた。（写真1参照）

そして，上着は，平面裁断で，ダーツを使わない。この上着は，胸から裾まで，色とりどりな色布で飾り，袖に三色の布を縫い合わせ，民族的な味わいを表現した。（写真2参照）

またスカートの形は，古代の「裙」（図10参照）から発想したものであるが，違うところは，ヒップの曲線を強調するため，ウエストにダーツを入れた。スカートにも上着と同様な色布で飾り，裾に縁飾りをつけた。（写真3参照）

こうしたデザインは，女性のスタイルを美しく表現し，上着を脱いでも，背中のあいたエプロンで体をぴったりと包み，セクシーなイメージとなる。エプロンと，上着と，スカートでワンセットとなって，一体感が感じられた。（写真4参照）

六　おわりに

中国古代服及び少数民族衣裳の研究については，最初，ただの趣味であった。

しかし，だんだん研究し重ねていくうちに，その服飾の背景として，文化，環境，風習などへの知識欲が高まってきた。次第にもっと深く，

服飾文化について知りたいと考えるようになってきた。

資料に見られた多彩な衣裳により，古代の先祖の脈拍を強烈に感じた。古代人及び各少数民族の人々が，長い歴史を経て，共同して創造した素晴らしい服飾は，現代人に残された宝庫である。

古代服の形式，紋様，色彩及び華やかな民族衣裳の背景を知るたびに，古代人の偉大さに感動してしまう。やはり，科学の進歩している現代にも，古い物を貴重に思い，さらに，現代服に融合し，より豊かな服飾生活を創造すべきである。

これからも，さらに中国古代服と民族衣裳を研究しながら，中華民族の優れた伝統文化を更に発見していきたいと思う。

参考文献

1）周汎　高春明　《中国歴代服飾》　学林出版社　1994年
2）王輔世　《中国緒民族服飾図鑑》　柏書房株式会社　1991年
3）楊権　尹素郷　呉明塀　除震時　《中国少数民族服飾》　株式会社美乃美　1981年
4）周汎　高春明　《中国五千年女性装飾史》　学林出版社　1992年
5）沈従文　《中国古代服飾研究》　商務印書館香港分館　1981年
6）周錫保　《中国古代服飾史》　中国戯劇出版社　1984年

謝　辞

平成7年4月から9年3月までの二年間，中里喜子教授のご指導を受けたことを感謝致します。

A　　B

図15　配色を変えたアレンジデザイン

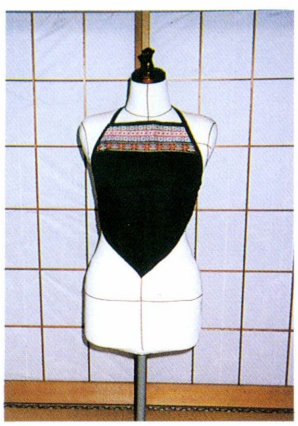

写真１　制作したエプロン

写真２　制作した上衣

写真３　制作したスカート

写真４　制作した全体着装図